



金子光晴全集



第十一卷

金子光晴全集 第十一卷 著者金子光晴 装幀者司修 発行者
高梨茂 印刷者山田博 発行所東京都中央区京橋二丁目一 中央
公論社 電話(五六一)五九二一 振替東京二一三四 ©一九七六
昭和五十一年十月十日印刷
昭和五十一年十月二十日発行



評論

Ⅱ

目次

日本人について

増補版に際して

初版はしがき

日本人について

日本人について 14 女について 22

実用ということ 26 なおも、男・女など

をめぐって 29 若さと老年と 33 働

くことについて 35 肉体というもの 36

ふたたび、男・女をめぐって 39 東京の

雑感 42 伝統の芸能 46 日本人につ

いてふたたび 49 文学との因縁 51

五倫を廃す 55

アジア放浪記

上海灘 58 おもいでになった上海歓楽境

63 没法子 70 世界放浪記 78 シ

ンガボールの裏街から 87 古都南京 92

無言の復讐 "白痴" 96 東京Ⅱパリだる

ま旅 97

秋の日記、ほか

秋の日記 108 武蔵野 110 断片 111

やくざっばい 113 海と詩 114

ふたたび日本人について

日本の窓口長崎 123 ああ 八月十五日

133 番付の心理 135 日本人のフニミニ

ズム 142 美しいことば 144

日本の芸術について

増補版に際して

初版はしがき

芸術について

一つの歴史 155 リアルの問題 159 あ

るリアル 162 私小説 165 芸術につい

て 169 永遠の革命 171 財宝 173

巫呪の話 176

個性と影響〈詩歌論と詩人論〉

近頃の感想 179 政治的関心 182 個性

と影響 192 雑感 193 偶感 195 文

学という業病 196 新しい詩について 201

詩人は報告する 204 現代詩と詩人の立場

『コスモス』雑記 219 前月号月評

238 文芸時評 243 誰のためにものを書

くか	247	小さな文句	248	詩壇時評
249	詩にかえて	252	『モラル』十月号	
を中心に	253	詩壇展望	254	感想
詩歌時評	257	小感	260	詩の弁
詩を中心にした時評	262	詩壇時評	264	
詩壇時評	265	詩評	266	感想
岐路	268	文語愛・伝統愛・風土愛	270	
血と地につながるもの	275	コクトーにつ		
いて	280	萩原朔太郎について	283	郁
さんのこと	286	佐藤惣之助の詩	288	
高村光太郎との僅かなかりあい	289			
「ある序曲」	291			
着物を剥がれた女達〈美術論〉				
着物を剥がれた女達	302	清親のこと	308	
騒音のなかの美術	312	玉置正敏	318	

日本の大衆芸人と番付〈増補〉

日本の大衆芸人と番付 328 戦後二十五年

と日本人 337 革命か無か 341 稲垣足

穂について 345 萩原と僕 349 高村さ

んのこと 351 一穂死す 353 戦後詩の

曙 355 吉田一穂のこと 356 象徴主義

の行方 359

後記

日本人について

増補版に際して

『日本人について』は、『絶望の精神史』を書いたあとで、言いたらないことを加えて、何年か経って発兌したものだが、その本が出てからも、いくらでも補足したり、書直してみたくなったりして困るので、こんどの改版が出るにあたっては、はじめから書直したりする暇がないので、その後の原稿に二、三篇の新聞などで発表したものを添えてみることにした。日本人のじぶんでしかわからない欠点が、じつは、ちがったニ・アンスで、他の国にも共通して在ることに気付いたとき、

日本人の欠点と言いきれない場合がたくさんある。無理にそれを枉げて、日本人の特性のように書くときは、世間に誤謬をつたえることになるのだから、慎重にまた、見通しよく筆をすすめなければならぬ。それにまた、僕が欠点として指摘したものが別の人にとっては、日本人の美点とみなされる場合もあって、氣質、体質によるそれぞれの観点によるのだから、互いに妥協の余地がないようにさえおもわれる。理論で片付く問題でなく、各人の感性がうけつけるか、素直にうけつけるわけにはゆかないかの岐路になっているわけで、例えば、この本に反撥を感じつつけてよむ人があるとすれば、

この本が世に出た理由もそれでわかるわけである。

それに、こちらのおもい通り他人を説伏しようという意図は、僕にはない。一つの手がかりをつかんで、日本人を考え、試みるという機縁を与えることができたなら、それでもう充分すぎるくらいなものである。それに、もう一言つけ加えれば、この本は、文献や、報告によって書かれたものではなくて、一個の人間の狭い経験のなかで感じたことを、書きつらねただけのもので、むしろ解釈の手がかりのために書いたものである。この本が出るのについては、中島可一郎さんや、小関さんになにかとお世話になったことを最後に感謝のことばとして擲筆する。

一九七二・九・二六

金子光晴

初版はしがき

僕の評論集を出すという。評論集というのは、表題が、少しものものしすぎやしないかと、おもう。本書の第一部に

「日本人について」という文章を書きおろしたが、第二部以下は、その時々に応じて、たのまれた新聞、雑誌などの、隨筆、感想、雜記のようなものを、大まかに區別して集めたにすぎないのだから。羊頭をかかげて狗肉を売るといふ感じがなきにしもあらずで、少々氣の退けることではあるが、隨筆集にしてはうるさく、雜文集では魅力がないので、他に言いようもないから、それで仕方がないということになったわけだ。

特に、評論を書くという氣持で書いたものはない。言いたいことを言うという程度のものだ。もともと僕は、若いときから、少々下手な詩を書いてきたので、詩人ということになつてゐる。他にちゃんとした才能をもっていないため、詩から得るわずかな報酬を、生計の足しにしていたことがあるので、職業詩人という銘までうたれた。ところで、自分では、職業詩人のつもりではないから、他人の作品も氣がむかふかなければ読まないし、自然、専門家的なカンにも欠けていて、正直言へば、ほんとうに詩というものがわかつていない。だから、ちゃんとした詩の批評や、論文というものを、あまり書いていないのだ。また、特にそういう興味もないのだ。

詩という仕事は、純粹にしなければ抒情詩という狭いものになり、ひろげれば、人生万般の批評精神につながるということにもなる。したがって、詩人は、詩の仕事のなかに、人間

批評、世界批評をもっているのだ、特に詩人の批評論文というものは、成り立たないというわけではないが、なにか作品の補足という感じになつてゆくようだ。今日では、評論を書く詩人がなかなか多くなつた。むかしのように、詩人は頭のできの悪い、劣等感の持主ではなくて、他の文学と同様、才子たちもすなる業になつてきた。もともと、詩や文学は、才子たちのやるものではない。作品がつまらなくて、評論がどれくらいということは、事によると、詩の困難を意味するのではないか。日本の詩は、まだ十分に成り立っているとは言えないが、成り立たせることがむずかしい条件のなかにあるのではないか。それでは、つまり評論だけが、作品の形態になるというような傾向に迫りこまれてゆきそうだ。

だが、僕のこの評論集は、決して、そんな大それたものではない。もちろん、作品といえるわけではない。これはあくまでも、その時々々のスポンサーの注文に応じて、御きげんを取りむすんで書いた、いわゆる、売文を集めたもので、おとくい本位で、お口に合う調味の仕方をしてあるのだ。戦争中の旅行ものなどは、特にそうだ。うっかりすると叱られるし、金ももらえないし、そうすれば、僕が困るし、それかと言って、やはり、ただそれだけではこちもたまらないから、すこしは言いたいことも言いたいし、根本においては、こちらも一個の人間だから、曲げられないことは曲げられないし、

まあ、そんなぐあいでは骨のないような、あるような、味方のような敵のような、読む人によって、どっちともとってもらえるような、そんな、ふしぎな書き方をしなければならなかった。「没法子」にしたってそうだし、上海の盛り場や、南京の思い出を書いたもの、南方の華僑のことを書いたものもそうだ。だから、その当時はこれらの文章は、最低のものであったにちがいない。そして、今日、読み返してみると僕自身は、当時の窮屈な自分の姿勢が見えてきて、胸が苦しくなってくるほどだが、今日読む読者にとっては、生煮えの豆腐のような味しくないだろう。それに、旅行記は今日とは事情がまるで変わってしまったいて、マレーだって、ジャワだって、中国だって、その後面目一新して、ここに書いてあるような世界は、昨日の絵物語にすぎない。

旅行中の記事、その他と、書きおろしの雑文「日本人について」とをあわせて、それを第一巻にまとめ、文学一般についての感想や断片を、第二巻に集めることになった。第二巻についてはまた、その巻に「まえがき」をつけることにする。「日本人について」は先にも言ったとおり、この集を出すにあたって、新しく筆をとったものだが、さて、書きはじめてみると、なかなかこれくらい長のきでは、はじめに意図したことが書きつくせない。用意も足りない。僕の最初の目論見としては、この文章の、孔夫子というシテ役をもっと突っこ

んだ場所まで立ち入らせて、日本人というものと対決させたかったのだが、日本人というものの本体を裸にするという工作について、まだまだ、不備なものがあつた。特に、これは、論理の助けを借りないで、矛盾があつても破綻が多くても、それはそのままにしておいて、現に生きている僕という人間の地肌でふれて、さぐってみて、つづりあわせるものならつづりあわせ、飛躍するなら飛躍させてゆきたいと企図したものだ。だから、儀式ばった姿勢をとらずに、できるならば、楽に寝ころがって、気のむいたとき勝手なことを書くといった態度で脱線しながらやってゆきたかったのだ。それがやっぱり、あとで読んでみると固苦しく世間の評論というものに追隨したあとがみえて、嫌になった。

こういうものは、自由日記体にして、これからも書いてゆきたいと思っている。

ここに集めたものは、だいたい、昭和七、八年、ちょうど、僕の第二回目の欧州旅行から帰ってきた時、僕が四十歳前後から、ふたたび原稿生活をはじめて、そここに発表しはじめてからのもので、約二十年間ぐらひのあいだに書きためたものである。それ以前、僕が二十歳から三十歳頃までの十年間に書いて発表した雑文類も相当な量があるわけだが、散佚してしまつて、今日では、どこをどう探しようもない始末だ。ネルバルや、ワイルドに心酔していた頃のアルティフィシエ

ルな文章もかなりあったから、ああいうものを集めれば、なかなか面白かったかもしれない。

そんなわけで、四十年間にわたる文章類は、年数が長いだけ、相当な量にのぼるわけだが、今度、集めてもらったものだけでも、とうてい収録しきれない。その選択は、他人にまかせた。それなればこそ、かえって割合に短い時間にこれだけまとめ上げることができたような次第でもある。長い時間のあいだには、僕の考えもずいぶん変化してきている。

この集をつくるに当って、児玉惇さんや、中島可一郎さん、秋山清さんなどの協力、助力をわずらわしたことを、ここで深く感謝する次第である。

一九五九・九・二〇

金子光晴

日本人について

日本人について

——話さないほうがよかった。

誰しも、そう考えるだろう。話は、なにことも相手にわからせることができなかった。

話された相手も、わからうとして、あるいはわかったつもりで、似もつかぬ別なことをそれとおもいこんで、それで打ち切りとなるよりほかなかった。

ほんやりと顔をながめているだけのほうがよかった。話したあとの疲労と、落胆がないだけでも、まだましだ。

先生は、教壇の机の上に、泥靴の足をのせて、目をほそめて、生徒たちのほうをながめた。教えることは、無駄だ。泥^{どろ}洲^すにもぐり込む、むなしいそれ弾だ。

だが、口は、話さずにはいられないのだ。話さない人とい